



上機嫌でいこう

富津市立青堀小学校校長 やました しゅういちろう 山下 秋一郎



○ はじめに

7月のある日、学校をつくるというテーマで原稿依頼を打診された。本校は令和10年度の新校舎完成を目指して、今年度から「富津市立青堀小学校改築基本構想・基本計画検討委員会」を立ち上げ、検討を重ねている。そのことをどこかで聞きつけての原稿依頼と思い、それなら書けるだろうと安易に考え引き受けた。ところが、送られてきた資料を読むと校長としての理念や学校経営の実践について書けと記してあるではないか（そっちの創るか）。私も校長だから、それなりに学校経営は行っているつもりだが、学校を創ると言えるような特色ある実践はしていない。若手職員の育成や生徒指導の充実などに力を入れているが、特に独自の手立てを講じているわけでもない。これは困った。何とかしなければ。しかし、校長が困った顔、不機嫌な顔をしているわけにはいかない。常日頃、上機嫌でいこうと職員に話しているのだから。上機嫌でいこう、そうか、これなら書けそうだ。

○ 上機嫌でいこう

学校要覧に次のように書いた。

不機嫌な人のところには人も情報も集まらないだけでなく、周りの人を不愉快にする。組織として生きていく上では一人ひとりが上機嫌で過ごすことがとても大切。子供に対しても、職員同士でも、保護者に対しても。もちろん家族にも。「春風を以て人に接し」、毎日を上機嫌で過ごそう。

子供も職員も保護者の方も、みんなが上機嫌で過ごせるように、少しずつ積み重ねてきたことを紹介する。微々たる取組であるが、これが私の学校を創るになるのだろう。

まずは、あいさつから

1年目に学校教育目標を変えた。誰もが覚えやすいように青堀の文字をもとに「あ：あいさつする子、お：思いやりのある子、ほ：本気で学ぶ子、り：リーダーになる子」。また、9つある経営の重点の一つとして、1年目は「あいさつをすべての突破口に」、2年目は「あいさつの輪をカラスまで」とし、あいさつの励行に取り組んでいる。上機嫌で過ごすためには、何より人と人との円滑なコミュニケーションが大切。あいさつをその第一歩と考え、保護者、地域を巻き込んで取り組んでいる。今年度から立ち上げた学校運営協議会でも取組の柱として位置付けている。

ユーモアのある情報発信を

職員に、保護者に情報をいろいろな形で発信する。その際に、どこかくすつと笑えるような部分を作ることを常に意識している。たよりを読んで、ホームページを見て、笑顔になってほしいという願いがある。学校から配布される文書は非常に多い。これだけ情報が氾濫しているなか、堅い話だけでは最初から読んでもらえないのではという危惧もある。

学校だよりでは、「校長のひとこと」というコーナーを最後に設けて、子供たちとの関わりを紹介している。実際のたよりから一つ紹介する。

先日、1年生の教室に入った時のことです。
「校長先生、名札の安全ピンが取れたので、
つけてください。」

おあい御用、素早くクリアできました。

「校長先生、ひもがほどけなくなっていました。」

老眼なので目を細めながら、こぶをほどこいて何とかクリア。さらに、

「校長先生、お友達の髪の三つ編みがほどけてしまいました。」

……無理です。担任の先生を探しに行きました。

また、職員へのたよりは、校長の考えを伝えるとともに、職員の頑張りを認める場でもあるという考えのもとで発信している。最後に「上機嫌」という項目を設け、学校だよりと同様に、校内のエピソードを紹介して、笑顔で読み終わられるようにしている。

ホームページは毎日更新し、ほほえましい子供たちの姿をアップし、心が温かくなるようなコメントを心掛けている。興味があったらご覧ください。

職員、子供への声掛け

毎日、教室を回って、職員と子供の様子を観察する。そして、空いた時間に子供の姿をもとにして職員と話をする。授業について評価をするときもあるし、指導をするときもある。しかし、子供の成長ぶりを話題にして、一緒になって喜ぶ時が最も多い（もしかすると、この声掛けが、職員の在校時間の増加につながっているのかもしれない）。

また、何か面白いことはないかと若手職員に声を掛けることもある。それが、バレーボールやバスケットボールなどの職員レクにつながる。運動会でもマル秘メニューとして、職員リレーを行うことができた。もちろん、子供にも保護者にも大好評だった。

朝、ゴミを拾いながら、登校指導をする。「おはようございます」のあいさつとともに子供たちとの会話を楽しむ。また、自転車に乗って学区を回り、登校指導するときもある。遠くから「おはようございます」と声を掛けると、子供たちがびっくりしたり、笑顔になったりして応えてくれる。見送りに出ている保護者の方とも話ができるチャンスだ。さすがに、授業中の声掛けは慎んでいるが、休み時間や担任がいないときなど、教室で交流を楽しんでいる。楽しみ過ぎて、戻ってきた担任から冷たい視線で見られることもある。昼休みから清掃の時間帯も子供と交流できる貴重な時間。

667名の子供の顔と名前を一致させることが目標だが、子供がマスクをしているためか、年齢による記憶力低下のためか、なかなか進まないのが悩みである。

職員にも子供にも積極的に声を掛けて、よりよい人間関係をつくる。それを積み重ねることで、互いに上機嫌で過ごせるようになると信じてこれからも声を掛け続けていく。

○ むすびに

「元気な人がリーダーではなく、周りの人を元気にするのがリーダー」という言葉を聞いたことがある。目指すのはこれである。声を掛けたり、情報を発信したりして、職員、子供、保護者を少しでも上機嫌にしたい。

実際、学校では毎日、様々なことが起こる。頭を抱えるようなこともある。それでも、職員が正面から課題解決に向き合ってくれているので、学校経営が成り立っている。本当にありがたい。感謝の気持ちを忘れずに、残り数か月、頑張りたい。くれぐれも、「上機嫌なのは校長だけ」と言われないようにしたいものだ。



「背中で支える」

市川市立大柏小学校教頭 しんどう のりかず 進藤 憲一



1 はじめに

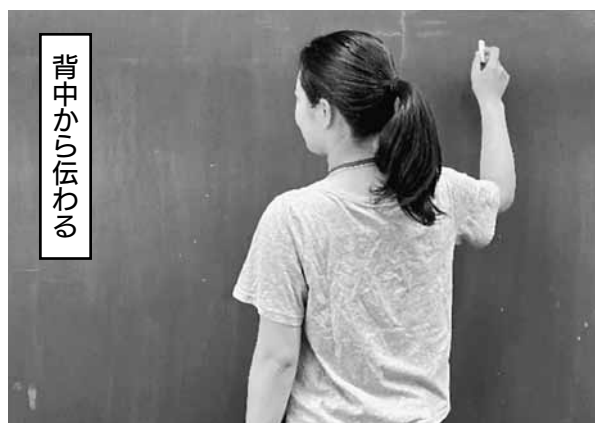
「千葉教育」に寄稿のお話を受けてから「学校を支える」ことについて考える機会が増えた。“自分は本当に学校を支えられているのか”まさにその点についてである。

教頭の職を拝命して2年目。反省しきりの日々だが、以下には自分が意識して行っている実践についてまとめたいと思う。

この原稿を読んでもくださる皆様には、目新しい内容は全くないかもしれないが、ご容赦いただけると幸いである。

2 背中で語れる大人になりたい

さて、「どんな教師になりたいか」という問いに、よくこのように考えていたことを覚えている。「背中で語れるような大人になりたい」と。Society 5.0、ICTを活用した教育や業務改善、個別最適な学び、などなど、いわゆる「令和型」と呼ばれる教育実践や変革が必要な時代に、かなり古臭い“昭和”な考え方だと我ながら思い知らされるが、担任の



担任の背中から伝わるものとは。

時代も、教頭としての日々もそのような心情で取り組んできた。余談になるが、自分の憧れの人物像は、昭和を飾った銀幕のスターの一人。不器用な感じの、と言ったら伝わるだろうか。

3 「支える」を意識しているとしたら

自分が意識して行っていることを振り返ってみると当たり前の実践しか浮かんでこない。唐突ではあるが、自分が勤務している市川市の教育の基本理念“つなぐ”という側面から実践をまとめてみる。

(1)ただひたすらに健康観察

職員とのつながりを意識していることの一つとして、出退勤時の健康観察がある。自己の健康管理については、社会人である以上、自己責任の側面が大きい。しかしながら、本人も知らないうちに健康を害してしまう教職員は多く、これは全国的にも問題になっている。気になった職員には声を掛ける。校長、養護教諭、学年主任、気のおけない同僚と連携し寄り添う。教職員を支える実践としては、ただひたすらこの点に尽きると思う。

(2)ただひたすらにコミュニケーション

ただひたすらに、ということである。職員とのコミュニケーションもその一つである。紹介できる内容としては、放課後の施錠・見回りをその機会と捉えているということだろうか。通常では、15分から30分程度で終わることができるが、時には見回り小一時間ということもある。

誰でも話し合える雰囲気の醸成。月並みな表現になるが、諸問題を引き起こす多くの原因はコミュニケーション不足であると感じる。この行動が教職員間の望ましい関係づくりに役立っているとうれしいのだが、そう願うばかりである。



安心して。成績処理は効率的にできるよ。

(3)一緒に（保護者・地域とつなぐ）

本校は、市川市の北側に位置し自然豊かな地域である。PTA活動は令和3年度から、学級役員を置かず「完全ボランティア制」に移行している。また、学校と地域の連携を推進するコミュニティスクールとしての活動も比較的に充実している。つまり、保護者・地域とも学校の教育活動に協力的であると言える。

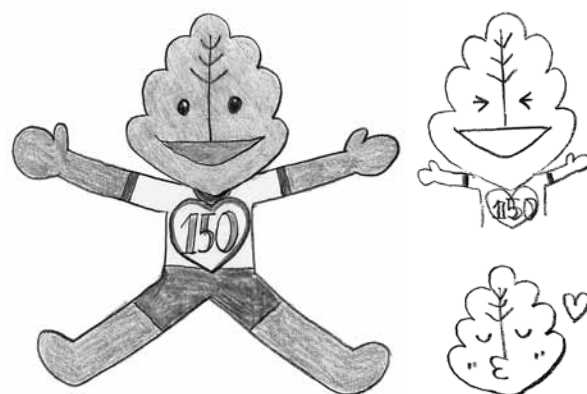
このような本校でも、保護者対応や地域との連携に悩んでしまう教職員は多い。そこで意識していることとしては、やはり一緒に対応することだと思う。トラブル対応はもちろんだが、教育相談として面談に参加したり、地域学習の支援をしたりと、担任と保護者、職員と地域をつなぐという面で教頭が担う側面は大きいと感じている。

(4)学校教育目標とつなぐ（行事を通して）

本校の学校教育目標は「心豊かな子どもの育成を目指して」その中でも重点として挙げられているのが、「主体性の伸長」である。

教育活動の中で、コロナ禍の2年間、最も高められなかったのが“行事を通しての主体性の育成”ではないだろうか。令和5年2月に創立150周年を迎える本校は、11月に周年行事を控えている。“児童自身が創り上げる”をテーマに準備を進めているところである。

児童の主体性だけでなく、教職員の主体性について育成していく必要がある。教頭としては助言する程度だが、いろいろな面で自分も参画させてもらっている。下のイラストは、担当職員が全校児童に呼び掛け、寄せられた作品の中から決定したものである。その後、運動会などさまざまな場面で「かしわいごまるくん」に扮した児童が行事を盛り上げている。



イメージキャラクター「かしわいごまるくん」

4 おわりに

まとめてみると頭に浮かぶのは「自分は、本当に背中で語れているだろうか、学校をしっかり支えられているだろうか」であり、答えは出ないままである。先にも述べたが反省ばかりである。（もちろん、あこがれのスターには近づこうはずもなく。）

ただ、少なくとも自分自身「楽しく人生を歩んでいる」という背中にはなれるよう、今後も学校を、職員を“支える”努力をしたい。



チーム学校の変革期を迎えて

茂原市立茂原小学校教諭 しのだ 篠田 あつし 淳志



1 はじめに

本校は児童数274名、学級数14（うち特別支援学級2）学級の中規模校であり、創立149年を迎える歴史と伝統ある学校である。私は本校で新採となり、複数校勤務し、縁あって再び本校に勤務している。現在6年目を迎え、教務主任としては3年目となる。

2 教務主任としての取組

(1)管理職と教職員との架け橋

管理職と教職員の間に教務主任が太いパイプでつながることが信頼関係を維持し、安定した学校になると考える。本校は職員間の雰囲気や風通しがよく、何事も一丸となって取り組めるチーム力が強みだと感じている。私は職員間で話題となった内容を整理し管理職へ提案したり、事前に管理職から今後取り組む内容を伺い、教職員へ周知したり意見を聞いたりしている。校長が示す学校教育目標の具現化を図るために、気持ちのよい職場となるよう、常に取り組んでいる。

(2)学力向上と授業力向上に向けた取組

児童の学力の向上は、教育課程を編成する中で、担任がいかに授業改善し授業力を向上できるかにかかっている。その課題を実現するためには教職員の時間を作ることが重要となる。本校では今年度、教育課程の編成を工夫し、3教科で専科指導を導入している。学級担任は専科指導の時間を活用して授業準備、資料作成、ノート指導等に時間を充てることができ、児童は専科指導による専門知識を生かした指導を受けることで意欲的に授業に参加でき、双方にとってよい影響を与えている。

(3)若手育成への取組

14名の学級担任のうち、30代までが8名と若手職員が多い。若手育成は児童の成長に直結する大変重要な課題である。そのため、学級経営や教科指導を中心に悩みを聞くことに努め、アドバイスをしたり、学年主任に話をしたりしている。また、率先して動き、若手の気付きや手本となるよう心掛けている。

(4)保護者・地域への取組

新型コロナウイルスの影響により、授業や運動会の参観等学校へ来校する機会が激減した。学校評価アンケートでも学校の様子が見えないという意見がでた。そこで児童一人一人の学習の様子やできる限りの行事の様子を伝えていく方法として、ホームページをより積極的に活用した。行事の取組はもちろん、普段の授業や休み時間の様子等コロナ禍の中でも工夫しながら児童が安全に過ごせている様子を伝えている。アクセス数も増え、地域の方からも生活様式の変化がある中でも児童の楽しそうな姿が見られ、元気をもらえるとの声が聞かれ、効果が出ていると感じる。

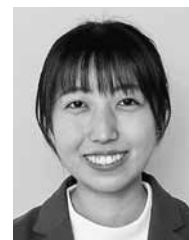
3 おわりに

感染症対策による生活様式の変化、ICT機器の活用による学習方法の変化、教職員の働き方改革による職務方法の変化等様々な角度からの変革期を迎えている。変わらないのは目の前の子供たちである。根底にある「全ては子供たちのために」を合言葉に、今後もチーム学校として円滑に機能していけるように努力をしていく所存である。



子供たちのために

香取市立北佐原小学校教諭 たちはら 立原 あみ 愛美



「愛美って、叱れるの？」これは、友達からよく聞かれることである。1年目の私は、「子供たちを褒めて伸ばしたい」という思いが強く、叱ることに苦手意識をもっていた。そのため、叱るべきタイミングを逃してしまい、けじめのない学級の雰囲気にも頭を抱える日もあった。そんな時、初任者指導の先生や先輩の先生方に相談すると、「先生が子供たちの良くない行動をスルーしたら、子供たちのためにはならない。その瞬間の指導が大切だ。」と教えてくださった。私はこの言葉を聞き、教員としての責任の大きさを感じた。

今年度は、1年生を担当している。元気いっぱい、天真爛漫。時には、友達同士でぶつかってしまうこともある。その時、時間はかかるが一人一人の話を共感的に聴きつつ、間違っていることは理由と共に伝えて、これからどうすべきかを考えさせるようにしている。解決した後の子供たちは嬉しそうな表情で、また一歩成長した姿がある。指導すべき時は、子供たちにとって成長のチャンスである。これからも頑張った時は思い切り褒め、指導すべき時は毅然とした態度で叱り、子供たちの成長のために粘り強く指導していく。

今年で、教員2年目を迎えた。まだまだ未熟な点も多いが、先輩の先生方や同期、子供たちや保護者の方、そして家族の温かさに支えられて今がある。これからも、常に学び続ける姿勢と感謝の気持ちを忘れず、「子供たちのため」に日々全力を尽くしていきたい。



学校職員の一員として

船橋市立三山中学校栄養教諭 こばやし 小林 あおい 葵



栄養教諭は全国に約6700名いる。学校の職員でありつつ、一日の大半は給食室で調理員さんとともに仕事をしている。安心安全で学びのある給食提供と食に関する指導を一体のものとして行うことが職務である。船橋市では、全校自校式で給食を提供しており、栄養教諭・学校栄養職員が1校に1名配置されている。一人職ということもあり、着任当初は何が分からないのかも分からない状態だった。また、生徒との関係性をどう深めていけばよいのかも分からず、日々の仕事は給食業務で手いっぱいの状態だった。自分のできていないところにばかり目がついてしまい、理想と現実のギャップに気付きながらも、何から手を付ければよいのか分からなかった。

「目の前の生徒や三山中学校に対して自分ができることをやってみよう。」働いていく中で、毎日の給食時間での生徒との触れ合いはもちろん、何気ない雑談、清掃活動、委員会活動など学校生活を生徒とともに過ごせることに価値や学びがあると気づいた。自校式であるからこそ、生徒や職員との距離が近く、栄養教諭が学校職員の一人として毎日いるという環境は、非常に恵まれている。この環境を生かし、生徒に寄り添った食に関する指導を行っていききたい。「食を通して何を生徒へ伝え、考えさせていくことができるのか。」2年目を迎え、生徒や職員との関係性が深まっていく中で今できることをやっていきたいと思う。



探究的な学びを育む教師の手立てと見取り —総合的な学習の時間を通して—

流山市立八木南小学校教諭 ^{すがぬま}菅沼 ^{えりか}得理香

1 はじめに

現在の学習指導要領は、探究的な学びが推進され、小学校から高等学校まで全面実施となった。探究的な学びの主な目的は、学力の向上や、変化の大きい時代の中でも生き抜く力を育むことである。特に、総合的な学習の時間においては、他の教科に比べて協働的、探究的な取組の中で、子供が確かな手応えを実感して学ぶ場面が多く見られる。

以下は、3学年で展開している総合的な学習の時間について、授業づくりや評価について取り組んでいることを紹介する。

2 授業について

子供たちが給食を通して、地域で作られるねぎの魅力をアピールする授業計画を立てた。子供の実態から、グループで対話する活動や、地域の方と関わる場を積極的に設け、普段の生活や学習との関連を図れるようにすることが必要であった。

学校教育目標の「自ら考え、心豊かに、たくましく生きる児童の育成」ができるよう、総合的な学習の時間を通して有効な手立てを考えた。

(1)材を選ぶ

総合的な学習の時間の学習は、社会に直接関わりながら学ぶことができるよさがある。子供にどのような環境を用意し、どの程度の時間を設定するか考え、意図的で質の高い指導を目指した。

(2)効果的に外部の学び手と出会わせる

コロナ禍で、見学や外部との交流をオンラインで工夫する機会が増えたが、対面や実体験だからこそ得られる学びや、喜びがあるのも事実である。実際に自分たちで野菜を育て、収穫し、袋詰めを体験するからこそ愛着がわく。毎日食べている給食のねぎが、自分の収穫したものだとわかれば「給食のねぎ」から「私のねぎ」と身近になり、家庭でも積極的に話題にするようになった。

(3)予想させる

活動の前には、どのようなことが起こりうるかを子供に予想させ、目的をもたせるようにしている。目的があるので、子供たちは主体的になる。実際にどうであったかを予想と比較したり、日常生活と関連付けたりしながら考えることができるからである。

下の写真は、子供たちがアンケート調査をする場所で、何をどのように聞いたらいのかが想像し、予想させた時の様子である。



調査に行く朝の時間帯は、急ぐ人が多いと予想し、答えてくれない人がいるかもしれないと考えた。また、赤ちゃんを連れている人

に元気な声で話しかけたら驚くかもしれない等、具体的にイメージしていた。課題を解決しようと、友達の意見を受け入れながら考えるため、グループでの対話が活発であった。

(4) ICT 機器の活用

従来、子供たちが地域の実態を調査する際は、質問内容を考えアンケート用紙を作成し、町に出て調査し、集計して分析していた。「集計」の作業をPCがその場で正確に行えるため、大幅な時間短縮につながっている。また、分析する時間を十分に設けられるようになった。今回は、アンケートフォームを使用し、子供が質問内容を考え、教師がPC画面を全体に共有しながら打ち込み、質問紙を作成するようにした。しかし、一人では操作が困難な子供や、機器を持ち出せない場合を考慮する必要がある。そのため、発達年齢を考慮し、質問紙でも行えるようにした。

3 評価について

(1) 実態調査

子供の実態を調べる際は、全国学力・学習状況調査の「総合的な学習の時間」及び、「子供につけたい資質能力」に関連する項目を抜粋し質問紙調査を行っている。勤務校では、「主体的に学習に取り組む態度の評価の見取り」について研究しており、それに関連する項目も抜粋した。しかし、従来のこの調査だけでは質問数が少ない。そこで、「主体的に学習に取り組む態度」を5つに分類し、子供の具体の姿を言語化したもの【表1】を質問に加えた。

子供のどのような姿を「粘り強く」取り組んでいると判断し、何をもって「学習の調整」をしているとみなすのか等、教師が適切な見取りを行えるようにした。それを評価の指標とし、学習活動もそれに沿って形成した。

更に、子供と教師が同じ視点で評価できるように、【表1】を子供に4段階で自己評価させた。

【表1】主体的に学習に取り組む態度の評価規準

協調性	①	誰とでも力を合わせることができますか
	②	相手の立場に立って考えられますか
誠実性	③	何ごとにも粘り強く取り組んでいますか
	④	見通しを持って取り組んでいますか
安定性	⑤	いつでも、同じように友達と接していますか
	⑥	誰に対しても変わらず、友達と接していますか
開放性	⑦	友達の考えや意見を受け入れていますか
	⑧	違いがあることは良いことだと思っていますか
外向性	⑨	自分から進んで取り組んでいますか
	⑩	様々な人と話したり行動したりしていますか

(2) 振り返りの時間の確保

毎授業後に、子供たちに振り返り作文を書かせている。書く際の視点を与えることもあれば、自由に書かせることもある。

振り返りの良さは、子供が学習したことの確認やまとめができ、事実を整理できることである。教師も子供のふり返しを見返し、観察ではわからない内面的な部分を知ることができる。子供の学びを見取ることにつながり、評価できるとともに、適切な言葉掛けができる。だからこそ、教師は記述の内容から、変容を見取る力が重要である。特に、書くスキルが発達していない低年齢の学年の子供や、発達により内省できない学年においては、子供へのヒアリングをする必要がある。教師が子供に対して、評価の観点に目を向けられるような、工夫した指示が出せるようにすることが、今後の課題である。

4 おわりに

子供が目への課題に対し、探究的な学びができるよう、教師も子供と工夫して、より良い方法を考えていきたい。また、教師が正解を用意するのではなく、子供と共に探究できるよう、今後も適切な支援や手立てを施していきたい。



各教科等を合わせた指導の指導計画 ～お助けツールの活用を通して～

君津市立上総小櫃中学校教諭 おばた あいこ 小幡 愛子



1 はじめに

知的障害教育において、各教科等を合わせた指導が必要となった場合、生徒一人一人に対して具体的に指導目標や指導内容を設定し評価を行うことや学習の積み上げを把握することが難しく課題としていた。

令和2年度から2年間に渡り、県総合教育センターの調査研究協力員となり「知的障害教育における各教科等の指導目標の設定及び学習評価を行うためのツールの開発」に関わることができた。このツール（以下お助けツール）を活用し、各教科等を合わせた指導の指導計画を整理し実践した内容である。

2 授業実践

単元名「ハチマキを製作し、納品しよう」

(1)年間計画

- ①近隣高校へ（4月～7月）
- ②駅伝メンバーへ（9月～10月）
- ③来年度新入生へ（11月～3月）
- ※年間を通じて校内販売を実施

(2)個別の目標

お助けツールの中にある各教科等のチェックシートを活用し、個に応じた指導目標を立て、どの教科で評価するかを考えた。2年A児の目標を以下とした。①在庫管理の中で数量に進んで関わり、数学的表現・処理をするとともに、そのことを生活や学習に活用しようとする態度を養うことができる。（数学）②作業や実習等について達成感を得て進んで

取り組むことができる。（職・家）③コンピュータ等の情報機器を扱い、体験したことや自分の考えを表現できる。（職・家）④販売の仕事に携わっている人々の仕事の様子を捉え、それらの仕事に見られる工夫を考え表現できる。（社会）

(3)授業の内容

①近隣高校への納品（15時間）

毎年、君津地区特別支援学級担任の代表者と近隣の高校とが連携を取り、高校生が体育祭に使用するハチマキを製作し納品している。高校が必要とする本数（およそ1000本）を7～10校で分担している。本校もその活動に参加しているため、昨年度は赤92本、白82本を製作し納品した。

作り方や布の色など指定されたものを使うことはもちろんだが、角を90度に引っ張り出していないものや縫い方が整っていないと製品として認められず返品されてしまう。そのため、細部にこだわって作ることを意識し、製品としてより良いものを作ろうという視点がもてる。自分で作ったハチマキが点検に合



まっすぐ丁寧にミシン縫い

格し納品できたことで、達成感が得られ自己肯定感が高められる活動となった。

② 駅伝メンバーへプレゼント（5時間）

校内駅伝練習は、夏休みから早朝練習が始まり10月まで厳しい練習が続く。その練習を乗り越えた生徒が学校代表として支部駅伝大会に出場する。特別支援学級の仲間も駅伝メンバーに選ばれていることもあり、激励会にはハチマキをプレゼントしたいとの提案があった。襷の色と合わせたハチマキを製作し、壮行会で渡すことができた。駅伝メンバーから感謝のメッセージをもらい、自分が学校や仲間の役に立っているという自己有用感を得ることが期待できる活動となった。



駅伝メンバーからのメッセージ

③ 新1年生へハチマキの納品（10時間）

本校の体育の授業は、ハチマキを着用している。また、1学期には体育祭があり、生徒がハチマキを使用する機会がある。そのため、次年度入学する1年生にハチマキを製作し使用できるように用意している。また、ハチマキを校内販売することで、様々な人とのやり取りを学んでいる。その際、作らなければいけない数を把握するため、在庫管理をしている。正の数・負の数の計算練習をした後、在庫表を作り、あと何本製作すれば良いか掲示物にして目標数を確認する。また、タブレットが得意な生徒は表計算ソフトを活用し在庫表を作成し入力することで納品日を意識しながら製作することができた。



正の数・負の数の計算を利用した在庫管理表

B	C	D	E	F	G	
	赤ハチマキ	白ハチマキ	赤ハチマキ	白ハチマキ	赤ハチマキ	白
日付	売れた本数	売れた本数	作った本数	作った本数	目標数	
4.15						92
4.25			26	0		56
4.26	3			8		59
4.27	2			3		61
5.1	5			24		66
5.18	1			2		67
5.19	11	5				78
6.23		4	7			71
6.23			9	3		62

タブレットで作成した在庫管理表

3 おわりに

お助けツールは年間をとおして、児童生徒がどのように学ぶことができたか、成長したのかを見定めることができるツールとなっていた。各教科等を合わせた指導では、1つの単元が2～3週間で終わる場合もあれば、1学期間必要な場合もある。今までは、目標や時数、各教科の評価に関して整理できずにいた。お助けツールの活用を通して、授業時数をあらかじめ算定し、関連する教科を学習指導要領と照らし合わせて授業時数の合計と、概ね一致するように調整した。また、年間計画を立てる際に、指導内容に適した時数を配当することができ、その目安があることで、1時間の目標が立てやすくなった。今後も活用を通して、個別の指導計画を充実させ、授業も児童生徒の実態に即したものを考えることで、さらに具体的な授業の評価や改善に結び付けていこうと思う。

※「お助けツール：千葉県総合教育センターのweb上に公開」

